

くまにち 論壇



慶応大大学院教授

蟹江 憲史

かにえ・のりちか 専門は国際関係論、地球システムガバナンス。著書に「SDGs (持続可能な開発目標)」など。52歳。

1月9日、約7カ月ぶりに八村塁選手が米プロバスケットボールNBAのコートに立った。私自身は本格的な競技経験はないが、縁あって日本のプロチーム・川崎ブレイブサンダースのSDGsに関するアドバイザーをしており、バスケットには少なからず関心を寄せている。現在滞在しているワシントンDCに拠点を置くワシントン・ウィザーズに所属する八村選手は、生で試合を見てみたかった選手だ。昨夏の渡米以来、そのチャンスがなかったが、ここにきて復帰し、とてもうれしい。

八村選手の復活は、米メディアも好意的に捉えていた。ジャパンマネーではなく、日本の若者のプレーそのものへの期待度が高く、素晴らしいことだと思った。試合も2点差でウィザーズが勝利し、久々にスポーツ観戦の興奮と醍醐味を満喫した。彼は試合に出なかった期間について多くを語らず、「個人的な理由」だとしている。ただ、かなり個人的なプレッシャーを感じていた様子がかげえる。日本人として初めてNBAのドラフト1位で指名され、直後のシーズンを戦い終えただけでも尋常ではない重圧があったはずだ。さらに現地の報道は、昨シーズン後に開かれた東京五輪のプレッシャー

多様性根付く国へ変化を

の大きさにも触れている。

曲折あった東京五輪は、最終的に「多様性」をテーマにした。そのシンボルとなったのが、八村選手とテニスの大坂なおみ選手だった。この2人に代表される多様性、と言えきれいに聞こえるが、日本で多様性といったところで、この2人ぐらいしか目立つ人がいないところに問題の根っこはある。自国開催のオリンピックは、ただでさえ大きなプレッシャーがかかる。その上、多様性が根付いていない社会の中で多様性を背負うことが、23歳の青年にとってどれだけ大変なことだったか。その苦しさは想像を絶するものであったことだろう。

ワシントン・ポストの記事は、その点を突いている。「日本人」と言うときに、多様な文化的、人種的背景がある人たちが含まれないことを当然としてきた歴史がある国で、八村選手が差別的な扱いに直面していたことにも触れている。

先月の「論壇」では、水際対策の名のもとに「外国人」の入国を拒否している日本の新型コロナ対応の問題点を指摘した。感染症を国外から日本に持ち込むのに、国籍や人種は関係ないはずだ。それでも行われる日本の政策に対し、世界保健機関(WHO)は警鐘を鳴らしている。

他方、「鎖国」にも似たこの政策を支持する国内世論の現実もある。多くの国が水際対策を緩和し、既に別の対策に力点を移す中で、G7諸国で最も強固な水際対策を誇らしげに首相が語っている状況は、世界的に見れば異質だ。しかも、その政策の2月末までの延長が決まった。多様性をテーマにする傾向は、五輪にとどまらず、さまざまなところで見られる。昨年末の紅白歌合戦もそうだった。歓迎すべきことだが問題は、そうしたイベントが、現状では一過性のものにとどまり、人々の心に根付いていないことである。

多様性を受け入れない社会で、多様性を根付かせ、政策に反映させるには時間がかかるだろう。だとしたら、一時のブームに終わらせず、腰を据えて取り組むことが大切だ。動かないものを動かすには、明確な数値目標の設定も一案だろう。

私が専門とするSDGsは、多様性を前提として、その多様性を力に変えない限り実現できないものだ。昨年末、日本政府が第5回ジャパンスDGsアワードを発表した。その表彰式の写真を見ると、男性が圧倒的に多いことに気づくだろう。数年前から女性の登壇者が徐々に増えてはいたが、授与する大臣たちは相変わらず男性ばかりだ。いずれにせよ、両者とも、女性がトップに立つことが当たり前にならなければ、現状は変わらない。

そして、見栄えだけではなく、本質を変えるにはどうするか。振り返ると、大坂選手も心の苦しみを訴えている。力を与えてもらっているわれわれが考えるべきは、多様性を当たり前として受け止められる心の変化ではないだろうか。

新型コロナ